

闇の中に輝く光④ 「あなたはだれですか」 ヨハネ 1:19-28

イエズス会の修道士であるアンソニー・デ・メロ師はこのような話をしました。ある女性が重い病気にかかり、生死の境をさまようとき、ある声が聞こえてきました。「あなたはだれですか」「わたしはクーパー婦人で、市長さんの妻です。」すると「わたしはあなたの名前や夫について聞いていません。あなたはだれですか。」「わたしは愛する二人の息子の母です。」「わたしはあなたがだれの母かを聞いていません。あなたはだれですか。」「わたしは学校で子どもたちを教える教師です。」「あなたの職業を聞いていません。あなたはだれですか。」「わたしは毎週教会に通い、夫を支え、一生懸命子どもたちを教えてきました。」「あなたが今までどう生きたのかを聞いていません。あなたはだれですか。」この話は模範の答えを示さず、ただその女性が回復してからは新しい人生を歩んだと言って終わっています。

わたしたちの人生は「あなたはだれですか」という問いの中でその答えを見つけていく過程ではないかと思えます。特に、試練の中でわたしたちはこの問いに直面します。普段は自分の名前、家族、仕事や活動、今までの業績などで自分自身がだれかを説明することで答えをもっているかのように過ごしていますが、試練の中ではそれらが答えにならないことに気づかされます。そこで深く考えつつ自分の内面から答えを見いだすとき、わたしたちの前には新しい人生の扉が開かれます。その答えが人生の道しるべになるからです。今コロナ危機をはじめ、様々な試練の中にあつて、皆さんはこの問いにどう答えられるでしょうか。「あなたがだれですか」

今までわたしたちはヨハネによる福音書の序論である1章1節から18節までを学んできました。「光は暗闇の中で輝いている」という希望のメッセージを中心とし、世界の全ては創造主なるキリストのものであること、また、わたしたちはキリストの光の中で身近なところでキリストに出会えると分かち合いました。それから、キリストを知り、素直に受け入れた人の上には恵みの上に、さらに恵みが注がれる幸いがあることを分かち合いました。今日からはその序論のメッセージが具体的に実現された物語を共に読んでいきます。そのはじめは主の光を受け入れた一人の物語、すなわち、最初のキリストの証人であったバプテスマのヨハネが過ごした二日間の歩みが描かれた物語なのです。

一日目：「あなたはどなたですか」

一日目は、危険が潜んでいる試練の場であり、恵みの場でもある荒れ野に住んでいたバプテスマのヨハネが、ヨルダン川の東側にあるベタニアに行ったときの物語です。ヨハネはそこでエルサレムから訪ねてきたユダヤ人たちに囲まれ、一つのことを問いただされました。「あなたは、どなたですか」(19節)ヨハネはこう答えました。「わたしはメシアではない」(20節)この言葉には「あなたたちはわたしがメシアではないかと期待しているかもしれない。今まで自分がメシアだと言いながら立ち上がった人がいたが、わたしは決してメシアではない。わたしは自分自身さえも救えない小さな存在にすぎない。」という思いが込められていると思えます。35節をみますと、すでにヨハネには弟子たちがいて、

きっと彼は多くの人々に影響を与えていました。その中には彼がメシアかもしれないと期待されている人もいたでしょう。ヨハネはこの質問に出会い、答えを見いだすことができました。「人々に期待されていても、わたしは人々を救うことのできるメシアではない」

すると、ユダヤ人たちは「あなたはエリヤですか」（21節）と尋ねました。旧約聖書によると、預言者エリヤは死なないで天に引き上げられました。（列王記下 2:11）そして、預言者マラキは「主の日が来る前に預言者エリヤをあなたたちに遣わす」（マラキ 4:23）と預言していました。ですから、ユダヤ人はヨハネがメシアではないなら、預言されていたエリヤではないかと聞いているのです。ヨハネはその質問を受けて、「わたしは主の御言葉を預かり、人々に告げる預言者ではない。」と明確な答えを見いだしました。

更にユダヤ人たちはヨハネに尋ねました。「では、あなたは、あの預言者なのですか。」（21節）ここにある「あの預言者」とは、モーセが主から受けた約束に登場する者です。「あなたの神、主はあなたの中から、あなたの同胞の中から、わたしのような預言者を立てられる。」（申命記 18:15）ユダヤ人はこの約束を信じ、モーセのような預言者を待っていました。ユダヤ人たちはヨハネがメシアでなく、エリヤでもないなら、モーセに約束されたあの預言者なのかと聞いたのです。この質問にヨハネは答えました。「そうではない。わたしはモーセのように主の言葉を託された偉大な指導者ではない。」

わたしは響きです！

そこで、ユダヤ人たちは言いました。「それではいったい、だれなのです。… あなたは自分を何だと言うのですか。」（22節）最後のその問いを通してヨハネが見出した答えはイザヤの預言からでした。「わたしは荒野で叫ぶ声である。『主の道をまっすぐにせよ』と。」（イザヤ 40:3）ここにある「声」には「音」という意味もあるので、ヨハネは「わたしは主の道を備えるための音だ」と答えました。言（ロゴス）なるイエス・キリストを知り、受け入れたヨハネという音によって言（ロゴス）の道が備えられるということです。この意味を明確にするために一つの例をあげてみましょう。わたしたちは山のとっぺんに上り、ヤッホーと叫びます。すると、その声は山の谷に響き渡ります。ヨハネは自分がそのヤッホーという言葉そのものではなく、エリヤやモーセのようにヤッホーと叫んだ人でもなく、山の谷間を響き渡る響きそのものだと叫んだのではないかと思います。

このようなバプテスマのヨハネの一日目はわたしたちの一生、あるいは試練にあった一定の期間を象徴するものです。わたしたちは自分が置かれた環境、自分がもっているものを通して自分自身を理解しようとしています。自分の家族、財産、仕事、経歴などがあたかも自分自身のように思ってしまうのです。信仰においてはどうでしょうか。神の前に立つときに、誰かと一緒に、何かを手握って、いろんな仮面をかぶって立とうとするのです。しかし、試練の中では、環境が変わり、持っているものが消えてしまう中で問われます。「あなたは本当にだれですか」そこでわたしたちがどんな答えを見いだすかによってそのときからの人生は変わっていきます。方向性が変わり、生き方が変わり、人生のゴールが変わっていきます。本当の自分として、自分の人生を生き、本当の自分として神の前に立つことができるのです。「あなたはだれですか」という問いは、わたしたちを主の器としてつくりかえてくださる主の恵みの業なのです。シャローム。